

〔資料紹介〕

浅沼稻次郎直筆原稿「早稲田の野党精神」(二〇一一年度原田三代治氏寄贈)

伊 東 久 智

〔解説〕

ここに紹介するのは、一九六〇(昭和三五)年、つまり暗殺されるその年に執筆された政治家・浅沼稻次郎(二八九八～一九六〇)の直筆原稿である。当時、早稲田大学に在学し、大学生協で広報員のアルバイトをしていた寄贈者の求めに応じて執筆されたもので(生協発行の広報媒体に掲載される予定であったという)、日本社会党野紙一四枚にペン書きされている。「早稲田の学生服を着た田舎出の苦学生の依頼に快く玉稿を提供してくれました」とは寄贈者の言葉であるが、この資料の来歴そのものが、人々から愛された大衆政治家・浅沼の温かさをよく物語っている。

内容は、浅沼が早稲田大学に進学する経緯、そして軍事研究団事件を前後する学生社会運動の内実を記録したものであり、その端々に浅沼の母校に対する愛着が滲んでいる。

以下、略年譜・影印(原稿画像)・翻刻の順に搭載することとしたい。

最後になるが、本稿作成に当たっては西腰周一郎氏(本学大学院博士後期課程学生)の協力を得た。記して感謝を申

し上げたい。

〔浅沼稻次郎略年譜〕

一八九八（明治三二）年二月二七日

東京府三宅島に生まれる。

一九二一（明治四四）年

東京府立三中に入学。

一九一八（大正七）年

早稲田大学高等予科に入学。雄弁会及び相撲部・ボート部に所属。

一九一九（大正八）年

民人同盟会結成。その後同会から分かれ建設者同盟を結成。

一九二〇（大正九）年

大学部政治経済科に進学。

一九二二（大正一〇）年

この頃から雄弁会の代表的人物となる。

一九二三（大正一二）年

早大軍事研究団に対する反対運動を展開。右翼学生による暴行事件発生

（軍事研究団事件）。

早稲田大学を卒業。

関東大震災直後に軍部に検束され市ヶ谷刑務所で暴行を受ける。

一九二五（大正一四）年

農民労働党結成。書記長に就任するも即日解散命令。

一九二六（大正一五）年

労働農民党結成。組織部長に就任。

日本農民組合常任委員に就任。

日本労働党結成。組織部長に就任。

一九三二（昭和七）年

社会大衆党結成。常任中央委員に就任。

一九三三（昭和八）年 東京市会議員に初当選。

一九三六（昭和一一）年 衆議院議員に初当選。

一九四五（昭和二〇）年 日本社会党の組織部長に就任。

一九四八（昭和二三）年 日本社会党の書記長に就任（分裂後は右派社会党の書記長に就任）。

一九五五（昭和三〇）年 日本社会党再統一。書記長に就任。

一九六〇（昭和三五）年 日本社会党の委員長に就任。安保反対闘争を指導。

同年一〇月一二日 日比谷公会堂で演説中、17歳の少年・山口二矢に刺殺される。

※浅沼追悼出版編集委員会編『幕進―人間機関車ヌマさんの記録』（日本社会党機関紙局、一九六一年）より作成

早稲田の秋虎精耕

早稲田

時を挽くは早稲田の心である。秋が早稲田を

育んでくるとは、大正六年をわが国とすると、今年が

昭和三十一年、~~昭和三十一年~~四十一年に当たる。この秋のこと

思ひあし、何かう何政、秋が早稲田を育てた方

を敬みこり下す。

秋の生かす大正、早稲田の一粒、秋、三度島、早

稲、秋、早稲田、八丈島、生かす、三度島、早稲田

三度島、生かす、秋、生かす、秋、生かす、秋、生かす

No.

①

日本社会党本部

No.

4.

双身に活動して居る早稲田を筆の注は初と早稲
田に昨人の心がある。

早稲田大は昔は明治の初年直野から引く

女学専攻の校を創出しその校名は女学専攻

女子大の校名は女学専攻とある。その存続の獨

立とは大隈侯の墓所とて存続の創始にある。

即ち一寺坪先生が女学専攻の校名の甲斐の隆

二ニろくは懐懐かよく大隈侯の言を存続

の勲を以てし居る。

今日本校の向を望む十有年の後漸くこの事

日本社会党本部

No. 6.

としそ 筆水に海である。

早稲田大学は経済学が有名だが、批判的力と

2者からなる素直。多しのおねえさんという層から、時の

批判的力としてお返ししてやる。彼に早稲田大学は

若くは同じ恨みしをい付石橋塔山はたかたつて

大隈侯は内閣は恨みした木村大隈は金主を

けつのが幸甚幸甚といひ。若早稲田の幸甚幸甚

日本社会党い多うか。これも日本社会党の批判的

批判的力である。

新島長あいつはさうだ、あれは百生は正しく

日本社会党本部

No. 又

世界戦争の後を交り、今世は常序のあり、

ドイツも常序のあり、いまは天と地、我、我、我、我

の思想研究家の福大の直傳の指導者である

一番の中心は、万動何と云われ、^{東子} 弟の天序

に去即修造をせ、^{東子} 中々、^{東子} 直傳格、^{東子} 直傳格

酒多即、^{東子} 三輪、^{東子} 三輪、^{東子} 三輪、^{東子} 三輪、^{東子} 三輪

百生の力、^{東子} 研究、^{東子} 研究、^{東子} 研究、^{東子} 研究

た、^{東子} 生、^{東子} 生、^{東子} 生、^{東子} 生、^{東子} 生

直傳格、^{東子} 直傳格、^{東子} 直傳格、^{東子} 直傳格

天と地、^{東子} 天と地、^{東子} 天と地、^{東子} 天と地

日本社会党本部

No.

9.

ゆく。とむを冬六所の事ま代ひ神りんとし云いあり。

中月十の形は方人四外に行を三人行いたるは

唐日かう云い、登舟が早船日の大湯屋で行めれた。

竹ノニの登舟式は舟には天一師田長、近衛師

田長と舟師の乗船の方々が素枝をかた、二か

百打す。百舟も舟師も登舟式にけ傍舷にゆく

とりしりけい登舟式は既済したものに古上石の

時止しが舟師田長が石を大村の勝況にたゝれた

と、とと私辞を遊ゆんとしと私り」と云い、舟師

才りますと解はう、一竹印がり、舟師、とか

日本社会党本部

No. 13.

には定居から飲天の目玉が少く来て居行しつた
街しむこと~~が~~。とした。

竹の~~後~~

六月の末りと月が~~か~~。天後日本を志す~~事~~作~~ら~~し

大極屋が行か~~れ~~。何即答を生は行街~~不~~城~~に~~古ノ

二層~~に~~。~~此~~こい~~の~~建~~し~~て~~は~~雲陽館の研究~~家~~が~~捜~~査

工~~の~~。そ~~の~~い~~た~~は~~ユ~~ー~~ン~~と~~切~~と~~所~~申~~し~~、~~神~~は

イ~~キ~~リス~~ト~~書~~年~~多~~知~~い~~た~~大~~極~~屋~~を~~申~~つ~~云~~が~~、

と~~い~~婦~~ち~~は~~傍~~つ~~本~~。三~~長~~一~~度~~一~~度~~一~~度~~を~~下~~山~~年~~先~~生~~

借~~理~~日~~得~~三~~三~~生~~の~~学~~と~~声~~は~~耳~~の~~疎~~う~~い~~居~~る。

右~~は~~早~~前~~建~~方~~の~~猪~~舞~~の~~よ~~い~~て~~て~~節~~の~~云~~和~~の

日本社会党本部

No. 14.

冷である。

何れにしても左部精神、右部精神、早治にの運府の

精神少々。田舎し時代は動く百段の創生者

大隈假け内閣を假使し、本筆を五指塔山氏も

内閣を假使した。早治に下るも愈々時代り

移平院を假の時代が秀一層と息力。

日本社会党本部

〔翻刻〕

早稲田の野党精神

浅沼稻次郎

時の流れは早いものである。私が早稲田大学に入ったのは大正^{〔マ〕}十六年それから数へると今年は昭和三十五年。丁度四十余年になる。その頃のこと〔を〕思ひ出しながら何故私が早稲田大学に入ったかを顧みて見たい。

私の生れは太平洋黒潮の一孤島、三宅島である。祖父は八丈島で生れ、三宅島に渡り父が三宅島で生れ、私も生れたものである。

大島、三宅、八丈と云つて所謂伊豆諸島は昔から流罪人が流され、八丈島では古くは源為朝、浮田^{〔宇野〕}秀家、三宅島には竹内式部、山県大貳、英一蝶と此の権力に反抗したものが流された。従つて此の地区に育つたものは第^{〔マ〕}分その影響があつたと思う。尋常六年生の時に神着砂村小学校に入ったが、小学校を出てから東京府立第三中学校に入った。たしか七人程で試験を受けたが、私一人だけ入つた。その時俺の成績も捨てたものではないと考へさせられた。

東京府立第三中学はその当時、八田三喜氏といふ進歩的校長が居り、河合栄治郎氏が三中を卒業して第一高等学校、東京大学に居られて時々来訪され、中学生を指導された。

この校長先生の教育と三宅島の育ちといふことが何たか将来は政治家になりたいといふ気持をいだかせる様になり、父は慶応義塾の理財科か医科に入れといふたが、私はこれに反抗して私を歩ませたのは自由の学園早稲田大学である。

政界で活動して居る早稲田先輩の姿は私を早稲田に呼んだのである。

早稲田大学は〔大隈重信が〕明治の初年官界から引いて東京専門学校を創立したのに始まるのであるが、その理想は学問の独立であった。そして学問の独立とは大隈侯の幕僚として学園創立に当った小野梓―東洋先生が東京専門学校の開校式の際ころみた演説がよく大隈侯の意を受け建学の趣旨を明かにして居る。

「余は本校に向つて望む 十数年の後漸くこの専門学校として改良刷新し、邦語を以つて我が子弟に教授する大学の位置にすゝめ、我邦学問の独立を助くることあらんことを。顧みるに一國の独立は國民の独立に基し、國民の独立はその精神の独立に根ざす、而して國民精神の独立は実に学問の独立に因るものなればその國を独立せしめんと欲せば必ず先づその学問を独立せしめざるを得ず、是れ数の天然に出ずるものにして勢の必至なるもの也」と、演説された。

官閥薩閥に反抗して野に下つた大隈重信氏が在野批判勢力として生れた姿である。

爾來早稲田大学は時の権力者に対する批判勢力として育成されて来た。多くの政治家を出して居るが、時の批判勢力として成長して居る。現に早稲田大学出身者で内閣を組織したのは石橋湛山氏だけである。大隈侯は内閣は組織されたが大隈侯は創立者ではあるが卒業生ではない。亦早稲田の卒業生は日本社会党に多いが、これも日本社会党が批判的立場だからと思ふ。

私の思出の一つであるが、われ／＼学生は第一次世界戦争の後を受けて、ソ連には革命がおこり、ドイツにも革命がおこつて日本には民主主義、社会主義の思想研究家が増大し官僚の指導者〔を〕養成し一番日本において反動何と（マ）思われた時の東京帝国大学に吉野作造先生を中心に、宮崎龍介、赤松克麿、波多野カナエ、三輪寿壮、門田武雄氏等を中心として学生のデモクラシーの研究実践団体として帝大新人会なるものが生れた、東大に新人会が生れて自由の

学園官僚藩閥に対抗して建学した早稲田大学に民主主義主義の研究実践団体として何等の組織がないのは遺憾であると
なして校内においては政治科教授の高橋清吾先生、春の学校騒動で学校を去られた大山都夫先生等を中心に和田巖、
私、稲村隆一、三宅正一、中村高一、佐々木修三氏等学生相寄り民人同盟〔会〕を組織して学生のデモクラシーの研
究、実践団体として活動して来た。この頃早稲田大学には学生の中に軍部から馬を借りて乗馬隊な〔る〕ものを組織
して居たものが居た。この乗馬隊を中心に早稲田大学に軍事研究団を組織することとし、大正十二年五月十日早稲田
大学講堂でこれが発会式をあげること〔に〕なった。此の頃は軍縮によつて陸海軍兵力が縮小されてゆく。それを各
大学の軍事化で補わんとしたのである。五月十日私は友人の外国行を送つて行つて大学には居なかつたが、発会式が
早稲田の大講堂で行われた。

所がこの発会式の時には第一師団長、近衛師団長と軍部の要路の方々が来校された。これに反対する学生も発会式
には傍聴にゆくといふわけで発会式は緊張したものになったその時たしか第一師団長の石光大将が演説にたゝれた。
そして祝辞を述べんとして「私が」と云つたら「軍閥であります」と野次り、「一将功成り万骨枯る」とか「汝等勲
章からわれ／＼同胞の血がしたゝるか」早稲田大学の高田、塩沢先生がたてば「学校を軍閥に売るな」「大隈が泣くぞ」
と云つた様な野次が飛んで発会式はこわれてしまった。

私は当時雄弁会に関係して居た所が、軍事研究団発会式で奮闘した学生達が大学の軍国主義化反対のため学生大会
を開いて貰いたいと要求して来た。それで五月十二日正午から学園内の大隈侯の銅像前で学生大会を開いたが約五千
人程集つた。たしか安達正太郎君が開会の辞を述べ私が決議文を読んで戸叶武君の演説に入つたら反動学生が乱入大
乱斗となつたそして大会は自然流会となつたが、その後進歩学生と反動学生との対立が激化し、私の如きは早稲田の
附近を歩くことも出来なくなつた、たしか五月の末頃と思ふが学校の裏戸塚署通り〔を〕歩いて居て縦横クラブのそ

の前を通ると中から学生が出て来て入れといふ。拒否したがとう／＼入れられて夜の八時頃から朝の四時迄、ブツケるなぐるずい分ひとい目にあつた。そして遂にウーンとうなつた。その時反動学生は私に対しあの学生大会は誰に頼まれてやった、社会主義者に頼まれてやったのだらう。謝罪文を書けといふ。然し誰に頼まれやつたわけでなく雄弁会の幹事として学生大衆の意志発表と、学問の独立、研究の自由、批判の自由の立場からやつたのであるとこれを断つた。

然るところブツ、ケル、なぐるで朝になつて街頭にほうり出されたが身動きが出来なかつた。

身動きの出来ない体で友の小助川君の所に立寄つたら大問題となつて指導教授である。大山郁夫先生、猪俣津南雄先生、佐野学先生 北沢新次郎先生には足尾から鉸夫の同志が出て来て尾行して防衛したこととした。

その後六月の五日と思ふが、第一次日本共産党事件で大検挙が行われた。佐野学先生は行衛不明になつて居た。これに関連して恩賜館の研究室が捜査された。それで大学ヨーロッパ運動を展開し、神田のキリスト〔教〕青年会館で大演説会を開いたが、その時出演された。三宅雪嶺先生大山先生福田得三先生(秘)の姿と声は耳に残つて居る。

右は早稲田建学の精神の上になつて動いた私の姿である。

何れにしても在野精神、批判精神が早稲田の建学の精神である。然し時代は動く〔。〕学校の創立者大隈侯は内閣を組織し、卒業生石橋湛山氏も内閣を組織した。早稲田大学も愈々時代の指導権を握る時代が来て居ると思ふ。